

3. 信者の義務

(1) 世を愛してはならない

Iヨハ 2:15~17 あなたは世も世にあるものも、愛してはいけません。もしだれかが世を愛しているなら、その人のうちに御父の愛はありません。すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。

① ここで言う「世」は、サタンが支配するこの世のシステムである。

- もし、この地上世界全体を指す世（3つの意味の内の①）であるなら、創造主なる神がお造りになった世界であるのに、「御父から出るものではなく、世から出るもの」と言うのは成り立たない。
- もし、人間全般を指す世（3つの意味の内の②）であるなら、ヨハ 3:16 「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された」とあるのに、その世を愛してはいけない、というのであれば、やはりこれも意味が通じない。

② ここは、サタンによって動かされている、この世のシステムとしての「世」である。具体的には、「肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢」を刺激する、いろいろな仕掛けである。人々は、それらに価値があるかのようにして追い求めているが、実は、「世と、世の欲は過ぎ去ります」、過ぎ去っていくものである。信者は永遠の世界につながっているのだから、過ぎ去るものを愛してはならない。

(2) 「暗闇のわざ」に加わってはならない

エペ 5:11 実を結ばない暗闇のわざに加わらず、むしろ、それを明るみに出しなさい。

① どういうことが「暗闇のわざ」に当たるのか

エペ 5:3~4 あなたがたの間では、聖徒にふさわしく、淫らな行いも、どんな汚れも、また貪りも、口にすることさえしてはいけません。また、わいせつなことや、愚かなおしゃべり、下品な冗談もそうです。これらは、ふさわしくありません。むしろ、口にすべきは感謝のことばです。

② どういうことが「加わる」に当たるのか=そういう人たちの仲間になること

エペ 5:5~7 このことをよく知っておきなさい。淫らな者、汚れた者、貪る者は偶像礼拝者であって、こういう者はだれも、キリストと神との御国を

受け継ぐことができません。だれにも空しいことばでだまされてはいけません。こういう行いのゆえに、神の怒りは不従順の子らに下るのです。ですから、彼らの仲間になってはいけません。

③ 暗闇のわざから離れるためにはどうしたらよいか＝明るみに出すこと

エペ5：8～11 あなたがたは以前は闇でしたが、今は、主にあって光となりました。光の子どもとして歩みなさい。あらゆる善意と正義と真実のうちに、光は実を結ぶのです。何が主に喜ばれることなのかを吟味しなさい。実を結ばない暗闇のわざに加わらず、むしろ、それを明るみに出しなさい。

- 主にあって・・・キリストにあるという特別な地位をいただいております、信者はすでに、光となっている。光の子どもである。光の子どもとして歩もうとするなら、神は必ず実を結ばせてくださる。
- 吟味する・・・何が主に喜ばれることなのか、吟味する。善意から出ているのか、それとも自分を利するための思いから出ているのか。正義か、不正か。真実か、偽りか。(参考 ヤコブ3：13～18)
- 明るみに出す・・・Iヨハ1：9の命令に従うことである。暗闇のわざに関わってしまったなら、それを父なる神の前に祈り、自分の罪を言い表して、清めていただく。

Iヨハ1：9 もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。

これを行うことで、私たちは再び光の中を歩むことができる (Iヨハ1：5～7)

(3) 世から汚されないように自分を守ること (ヤコ1：27)

ヤコ1：27 父である神の御前でできよく汚れのない宗教とは、孤児ややもめたちが困っているときに世話をし、この世の汚れに染まらないよう自分を守ることです。→世は信者を罪に引き込もうとする、信者は罪に関与することを拒む。

(4) 世と関わる人は、関わりすぎないようにすること (Iコリ7：31)

Iコリ7：31 世と関わる人は関わりすぎないようにしなさい。この世の有様は過ぎ去るからです。→泣いたり、喜んだり、買ったりすることが多すぎると、世のことに心を配り、思い煩うようになる (Iコリ7：30～35)

4. 主戦場は思考（マインド）の領域

第三の前線、世との戦いにおける主戦場は、思考の領域である。

他の二つの前線ではどうか。第一の前線、「罪の性質」に対する戦いでは、罪の性質が信者の体を道具にして働こうとしてくるので、主戦場は信者の体であり、日々の行いである。また、第二の前線、「サタンと悪霊たち」に対する戦いでは、サタンは、誘惑（試み、試練、苦しみ）や支配という戦法によって信者に罪を犯させようとする。また、策略という戦法をもって、よく似ているように見えて実のところ偽のイエス像を宣伝したり、全く異なる福音を提唱したりして、信者を混乱させ、神から引き離そうとする。では、第三の前線、世に対する戦いにおいては、主戦場はどこか。それは、信者の思考の領域である。

(1) 信者の思考（マインド）を巡る戦い

ロマ 12:2 この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心（思考）を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。

- ① 思考は、この世との戦いの主要な戦場である。なぜなら、信者の思考は、信者になる前までは、この世が考える通りに考えるよう、プログラムされていた。「この世と調子を合わせる」ようにセットされたマインドである。
- ② 「この世と調子を合わせる」とは、この世のシステムに対して、同じように考え、行動し、一致していくことである。この世のシステムは、中絶や進化論を、あたかも正しく当然であるかのように、人々の思考に受け入れさせようとする。この世との戦いは、思考をめぐる格闘である。
- ③ よって、信者になったら、思考を一新する必要がある。思考を一新することは信者の義務である。次のように命令されている。「思考を新たにすることで、自分を変えていただきなさい」
- ④ この命令の、ギリシア語の時制は、現在形 → 思考の一新は、一度限りで終わることではなく、日々、継続して、である。この世によって私たちの思考をコントロールされてしまわないように、この世から入ってくる日々の情報をチェックし、日々、継続的に思考を新たにしていかなければならない。

(2) 「思考を一新する」方法 3つ

① キリストの思考を持つ (I コリ 2 : 16)

I コリ 2 : 16 「だれが主の心 (思考) を知り、主に助言するのでしょうか。」しかし、私たちはキリストの心 (思考) を持っています。

- 具体的には、新約聖書に記された「**神の深み**」(I コリ 2 : 10)、あるいは「**神の奥義**」(I コリ 2 : 1) を学び、理解することである。
- それは同時に、信者が「**成熟した人**」(I コリ 2 : 6)、すなわち霊的に大人になること、霊的に成長することを意味する。
- キリストの思考を持つとどうなるか、その特徴として聖書が挙げているのは、「**へりくだり**」である (ピリ 2 : 3)。みことばを学び、奥義を理解したとき、信者はより謙遜な者となっているはずである。
 ☆ 注 ピリピ 2 : 2 の「思いを一つにして」、3 節の「思いなさい」、5 節の「この思いを抱きなさい」、いずれもギリシア語フロネオーが使われ、その意味は、「思考を働かせる」である。感情的な思いではない。
- 神の奥義を学んで謙遜になっていくのに対して、この世のシステムと同じ考え方をする人たちは、知識を持てば持つほど、尊大になっていく。

② 思考の目標をキリストに従うことに置く (II コリ 10 : 4~5、ピリ 4 : 8)

II コリ 10 : 4~5 私たちの戦いの武器は肉のものではなく、神のために要塞を打ち倒す力があるものです。私たちは様々な議論と、神の知識に逆らって立つあらゆる高ぶりを打ち倒し、またすべてのはかりごとを取り押さえて、**キリストに服従**させます。

- 私たちの思考の目標、考える先にあるのは、いつも、キリストのしもべとして従っていくことである。

ピリ 4 : 8 最後に、兄弟たち。すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて評判の良いことに、また、何か徳とされることや称賛に値することがあれば、そのようなことに**心を留めなさい** (考えなさい)。

- 私たちが考えるべきことのリストである。ただし、人の目から、世の基準で真実なことなど、ではない。次の 3 番目の方法が大切。

③ 神のことばを思いめぐらす (ヨシュ 1 : 8、詩 119 : 11、97、ヨハ 15 : 7、コロ 3 : 16、I ヨハ 2 : 14「あなたがたのうちに神のことばがとどまり、悪い者に打ち勝った」)

- 読む→学ぶ→暗記する→思い巡らす→思考が新たにされる